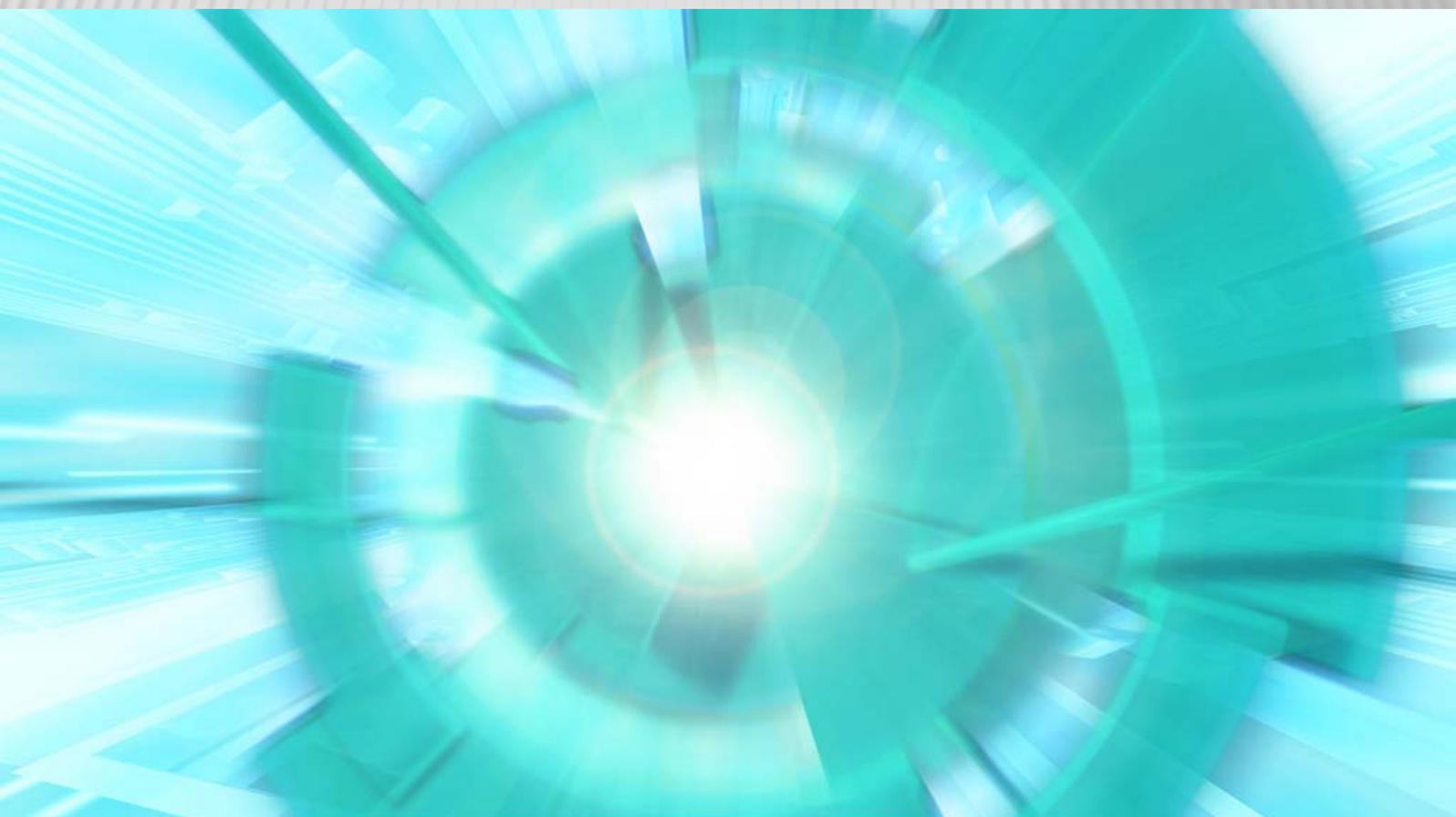


『留学交流』

2017年 4月号

特集

グローバル化する高等教育



JASSO

独立行政法人

日本学生支援機構

Japan Student Services Organization

特集 グローバル化する高等教育

- 【論考】** 1
「ASEAN+3高等教育の流動性・質保証に関するワーキング・グループ」の活動と「ASEAN+3学生交流と流動性に関するガイドライン」
Activities of the “Working Group on Mobility of Higher Education and Ensuring Quality Assurance of Higher Education among ASEAN Plus Three Countries” and “ASEAN Plus Three Guidelines on Student Exchanges and Mobility”
文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室専門職 小嶋 緑
KOJIMA Midori
(Office for International Planning, Higher Education Policy Planning Division, Higher Education Bureau, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)
- 【論考】** 7
教育と外交
-異なる位相の異なる夢想-
Education and Diplomacy: Different Phase, Different Wraith
千葉大学高等教育研究機構教授 大西 好宣
ONISHI Yoshinobu
(Organization for Higher Education Planning, Chiba University)
- 【論考】** 16
日本留学希望者を対象としたMOOC「Studying at Japanese Universities」の開講後の展開について
-定性的な側面に焦点を当てて-
The Progress of the “Studying at Japanese Universities” MOOC for Students Aiming to Study at a Japanese University: Focusing on Qualitative Aspects
東京大学大学院情報学環特任研究員 高濱 愛
TAKAHAMA Ai
(Project Researcher, Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo)
東京大学大学総合教育研究センター特任講師 藤本 徹
FUJIMOTO Toru
(Project Assistant Professor, Center for Research and Development of Higher Education, The University of Tokyo)
- 【事例紹介】** 28
文化学園大学のダブルディグリープログラム
-大学院英語コースを中心とした交流-
Double Degree Programs of Bunka Gakuen University: Exchange at Graduate School English Course
学校法人文化学園理事・文化学園大学事務局長 遠藤 啓
ENDO Hajime
(Chief Administrative Officer, Bunka Gakuen University)
- 【海外留学レポート】** 34
カナダのロンドンから
-ある経済学大学院生の留学記録-
From London, Canada: Study Abroad Report by a Graduate Student in Economics
ウェスタン・オンタリオ大学経済学部博士課程 小野塚 祐紀
ONOZUKA, Yuki
(Ph.D. candidate in Economics, University of Western Ontario)

【論考】

「ASEAN+3 高等教育の流動性・質保証に関するワーキング・グループ」の活動と「ASEAN+3 学生交流と流動性に関するガイドライン」

Activities of the “Working Group on Mobility of Higher Education and Ensuring Quality Assurance of Higher Education among ASEAN Plus Three Countries” and “ASEAN Plus Three Guidelines on Student Exchanges and Mobility”

文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室専門職 小嶋 緑

KOJIMA Midori

(Office for International Planning, Higher Education Policy Planning Division,
Higher Education Bureau, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology)

キーワード： グローバル化、ASEAN+3、国際連携、学生流動性、質保証

1. はじめに

今年、1967年にASEAN（東南アジア諸国連合）が「バンコク宣言」によって設立されてから、50年の節目の年にあたる。ASEANの総人口は2015年の6.3億人から2030年には7.3億人まで増加すると予想されており、ASEAN向け直接投資は増加の一途である¹。ASEANが目覚ましい人口増加と経済成長を遂げ、さらに2015年末のASEAN経済共同体発足で存在感を増し続ける中、世界の注目がASEANに集まっている。日本とASEANとの交流は1973年に設立された日ASEAN合成ゴムフォーラムに始まり²、来年友好協力45周年を迎える。安倍首相の年頭の外遊がフィリピン、インドネシア、ベトナムというASEANの3か国から始まったことも記憶に新しい。日本はこれまでも様々な形でASEANとの協力関係を築いてきたが、ますます重要となる地域のパートナーとして、どのように関係を発展させていくべきかが問われている。

¹ 三菱総合研究所（2015）「内外経済の中長期展望 2015-2030年度」新興国経済

² 外務省「日・ASEAN友好協力40周年」

このような背景の中、文部科学省においても、日 ASEAN の結びつきを深め得るグローバル人材の育成や、大学の ASEAN への展開を後押しするという観点から、日 ASEAN の大学による国際教育連携の取り組みの強化や学生交流の促進に力を入れている。例えば「大学の世界展開力強化事業」では、2011年の開始以来3度、ASEAN 地域³を対象とした大学間交流を予算事業として公募・採択し、ASEAN の大学と交流を進める日本の大学に支援を行ってきた。また、2014年から官民協働で開始したトビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムでは、ASEAN などの新興国への留学を希望する学生向けのコース⁴も設置され、挑戦する学生を応援している。

本稿では、これら ASEAN 諸国に中国・韓国を加えた ASEAN+3 の枠組みで、日本が主導国となって開催する「ASEAN+3 高等教育の質保証と流動性の向上に関するワーキング・グループ（英語名：Working Group on Mobility of Higher Education and Ensuring Quality Assurance of Higher Education among ASEAN Plus Three Countries）」の活動と、その作成文書である「ASEAN+3 学生交流と流動性に関するガイドライン（英語名：ASEAN Plus Three Guidelines on Student Exchanges and Mobility）」について御紹介したい。

2. ASEAN+3 高等教育の流動性・質保証に関するワーキング・グループとは

(1) 設立の背景

ASEAN+3 は、ASEAN10 か国と日中韓の合計 13 か国からなる国際的な政府間協力・連携の枠組みである。1997年のアジア通貨・経済危機を契機に、ASEAN30周年記念の首脳会議に日中韓の首脳が招待される形で始まり、以降毎年首脳会議と外相会議（2000年以降）が開催される重要な外交の場となっている⁵。

2010年の第13回 ASEAN+3 首脳会議にて、その教育分野の協力枠組みとして、ASEAN+3 教育大臣会合の開催が提案、歓迎された。高級実務者会合等を経て、2012年7月インドネシアにて第1回 ASEAN+3 教育大臣会合が開催され、以降2年に一度、ASEAN 教育大臣会合に連続した日程で開催されている。教育大臣会合がない年も、高級実務者会合が毎年開催され、ASEAN+3 域内共通の教育関連課題の認識や、政府間協議、合意形成等の場となっている。具体的には、2012年の第1回会合で採択された ASEAN+3 教育行動計画（ASEAN Plus Three Plan of Action on Education:2010-2017）に沿った取り組み実績報告などが中心議題となっている。

ASEAN+3 高等教育の質保証・流動性向上に関するワーキング・グループは2012年の第1回 ASEAN+3 教育大臣会合で日本が設立を提案し、各国から歓迎を受けた。その後、書面上の決裁等を経て設立が

³ ASEAN の特定の国々、プログラムとの連携も含む。

⁴ 人文・社会科学系分野 新興国派遣（②新興国コース）。他に、国・地域を限定しないコースもある。

⁵ 外務省「ASEAN+3（日中韓）協力」

承認され、2013年9月に東京で開催された第1回会合では、将来の活動の方向性として、①学生交流のためのガイドライン案を作成すること、②質保証機関の定期会合の創設が合意された。



写真1：第1回ワーキング・グループ会合の様子

(2) 活動内容と意義

2013年に合意された委任事項書（TOR）によると、ワーキング・グループのミッションは「ASEAN+3教育行動計画に記された単位互換制度の開発と学術標準の調和化戦略（ただし、限定しない）とそのため活動を強調しながら、ASEAN+3域内で政策対話、調整、協力、高等教育の質保証と流動性の促進を強化・促進すること」と定められている。

TORはまた、ワーキング・グループの活動領域として、教育行動計画の該当項目だけでなく、その他の高等教育の協力における流動性と質保証の向上に資する事業やプログラムにも焦点をあてながら、次の4点の活動実践に重点を置くとしている。

- ・ 高等教育の質保証と流動性に関連する事業やプログラムの情報を共有すること。
- ・ 政策決定者や関係する高等教育機関の教職員の質保証関連能力開発（キャパシティビルディング）を促進すること。
- ・ 政策決定者と関係する高等教育機関の教職員間のネットワークを拡大し、コミュニケーションと相互作用を増やすこと。
- ・ ASEAN+3の国々への協力事業とプロジェクトを提案、実践すること。

ワーキング・グループのメンバーには、ASEAN+3各国政府や政府に任命された質保証機関等の他に、ASEAN大学ネットワーク（AUN）が含まれ、オブザーバーとして東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）や、必要と認められた組織も招待されることとなっている。これまでの実績では、SEAMEOの高等教育開発センター（SEAMEO-RIHED）やASEAN質保証ネットワーク（AQAN）などが参加している。ワーキング・グループの会合は毎年1回、これまでに4度開催され、その活動内容をASEAN+3教育大臣会合に報告している。

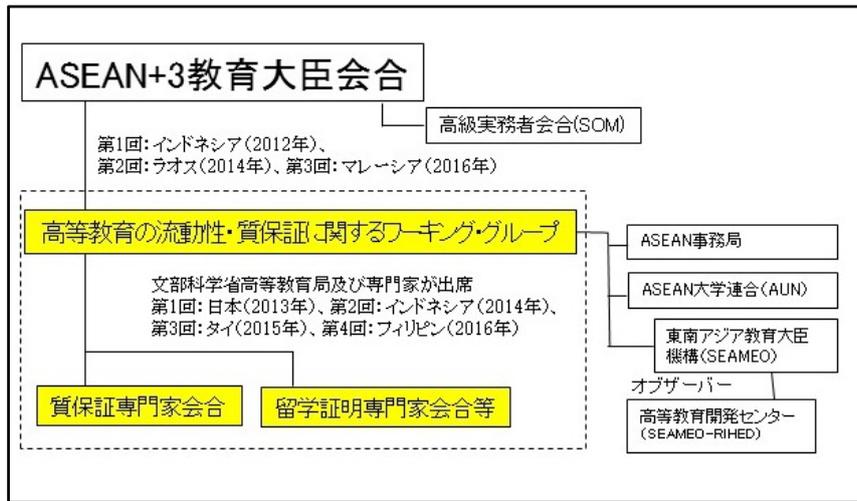


図1：ワーキング・グループの構造

ワーキング・グループの重要な意義の一つは、ASEAN+3 域内の相互理解、平和、発展を、高等教育、特に人材育成と国際教育連携の側面から支えることにある。SEAMEO-RIHED による AIMS プログラムや日中韓のキャンパス・アジア事業に代表されるように、ASEAN+3 域内の高等教育連携が進む中で、高等教育の調和化や質の伴った学生交流の制度面からの促進等を視野に、各国から行政官が集まり、具体的に課題を共有し議論できる、高等教育分野で唯一の国家間のプラットフォームになっていることは特筆すべきである。ワーキング・グループによる日本の貢献は、日本が ASEAN+3 の枠組みを重視しており、特に ASEAN の高等教育を中韓とともに発展させていくというメッセージの発信であると同時に、ワーキング・グループが促進する ASEAN+3 域内の大学間交流・学生交流により、将来の地域の経済・社会・外交的な関係を深化させるともいえ、その実践の意義は大きいのではないだろうか。

3. ASEAN+3 学生交流と流動性に関するガイドライン

第1回ワーキング・グループ会合にて、質保証を伴う学生交流のための基本的枠組みを提供し、各国高等教育制度の発展促進を目的とした「ASEAN+3 学生交流と流動性に関するガイドライン」の作成を日本が提案し、合意された。第2回ワーキング・グループ会合での議論を経て、最終的には、2015年タイ・バンコクでの第3回ワーキング・グループ会合にて草案が固まった。この内容は翌2016年5月末の第3回 ASEAN+3 教育大臣会合にて上程され、正式に承認されることとなり、同年7月には日本国内の国公私立大学、短期大学、高等専門学校向けに通知が発行されたところである(28 文科高第 401 号)。

同ガイドラインは、参加国が共有するビジョン、ガイドラインの目的、ガイドラインへの参加、学生交流及び流動性、単位及び単位互換制度、質保証、費用及びその他の責任、モニタリングの8項目と留意点から構成されている。特に項目4、5では、域内での学生交流プログラムの作成・運営の際

に考慮すべき点の紹介や、国際的な単位互換制度の整備促進などが言及されており、域内の学生交流とバランスのとれた流動性を促進する学生交流プログラムへの参照文となっている。国際連携が進み、一定の学生交流実績を有する日本の大学の国際担当部門からすると、既に常識的なことも含まれるが、高等教育制度が初期の発展段階にある国においては有用なものと考えられ、それらの国の大学と新たに学生交流プログラムを開発する際などに考慮すべき点として、是非御活用をお願いしたい。

4. 今後のワーキング・グループの可能性

同ガイドラインの留意点において、地域の学生交流と流動性の向上をモニタリングすることが確認されており、現在ワーキング・グループではその方法について議論を行っているところである。また、同留意点で示された新たなガイドライン「単位互換制度の換算表を含む、留学生のための成績証明ガイドライン」について、第4回ワーキング・グループ会合で草案が議論され、徐々に内容が固まりつつある。今後、各国の高等教育関連機関とコンサルテーションや試用の可能性が議論されている。政府間の協議の枠組みとして、今後ワーキング・グループをどのように利活用していくのか、更なる検討も求められている。

5. むすびにかえて

日本の大学・大学院を卒業した元留学生が、各国政府の要人や大学教員となり活躍されている例をしばしば見かける。これは、日本の高等教育による地域と日本への、長い目で見た貢献ではないだろうか。このような方々が、今後も活躍されることを期待するとともに、次世代に活躍する人材を日本の高等教育が更に輩出できるよう期待する。ASEAN 諸国の経済水準が上がり、富裕層や中間層の私費留学が増える中、今後どのように新しい層の学生を取り込んでいくか、彼らが学びたくなるような質の高い高等教育をどのように提供していくかが課題と言える。

また、現在日 ASEAN の学生交流は、受入れと派遣の実績に大きな差が存在する⁶。成長著しい一方で、欧米に比して安価、地理的文化的にも親しみやすい ASEAN 諸国は、既に日本の学生にとっても十分魅力的な留学先となっているのではないかと。今後、より多くの日本人学生が ASEAN への留学等を経験し、地域の架け橋となって活躍する人材が生まれることを期待したい。

ASEAN との学生交流が、従来形成されてきた日中韓の学生交流と相互に刺激しあい、ASEAN+3 の学生流動性向上に良い形で影響することを期待するとともに、各国の経済状況や高等教育情勢が多様な枠組みにおいて、このワーキング・グループの活動により、地域全体の高等教育の調和化と学生交流の質が向上することを期待したい。そして今後、世界でアジアが大きな役割を担う時代が到来したとき、

⁶ JASSO 調査、OECD、UIS 等

ASEAN+3 の高等教育圏で学んだ学生が、地域の平和と安定に資する人材として活躍することを祈念したい。

* 本稿は個人の見解を含むものであり、所属する組織の公式見解ではありません

<参考資料>

外務省「日・ASEAN 協力」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asean/j_asean/ 2017年3月24日アクセス

外務省「ASEAN+3（日中韓）協力」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asean/asean+3/> 2017年3月24日アクセス

文部科学省「ASEAN+3 高等教育の流動性・質保証に関するワーキング・グループ」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/1341803.htm 2017年3月24日アクセス

文部科学省「ASEAN+3 学生交流と流動性に関するガイドライン」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shitu/1379612.htm 2017年3月24日アクセス

【論考】

教育と外交

-異なる位相の異なる夢想-

Education and Diplomacy: Different Phase, Different Wraith

千葉大学高等教育研究機構教授 大西 好宣

ONISHI Yoshinobu

(Organization for Higher Education Planning, Chiba University)

キーワード：教育外交、グローバル人材、留学政策、サウジアラビア、イラン、グローバル化

1、はじめに

(1) 教育と外交の関係性に関わる筆者の体験

外務省は、わが国の留学（生）政策を司る官庁として、文部科学省と共にその双璧を成す。実際、同省のホームページには「留学生交流」と題する頁があり、そこに外務省としての留学（生）政策に対する基本的な考え方が示されている¹。それによれば、「留学生交流は、日本と諸外国との友好親善や対日理解の促進、日本の高等教育機関の国際化、地域・企業の活性化、及び開発途上国の将来を背負う人材の育成といった様々な重要な側面」を持っているという。

上記「留学生交流」の頁は外務省ホームページ内の中分類「広報文化外交」の一部であり、さらには大分類「外交政策」の一部として設けられたものである。つまり、外務省は留学（生）政策を外交政策の一部として認識し職掌している。

なんだ、そんなこと当たり前ではないか、外務省なのだからと反論される向きも多いであろう。しかし、筆者を含む多くの留学生教育関係者は、普段自らの仕事が一国の外交政策に関係しているとは余り意識しないのではなかろうか。教育のグローバル化がどれほど進もうとも、何か特別な出来事でもない限り、そうした高い意識、或いは異なる視点を、教育者である我々が持つのは難しいのではないだろうか。このような問題意識が芽生えたのは、実は筆者がかつて国連に勤務し、わが国の外務省と共同である留学生関連事業を担当していた頃である。

当時、筆者が国連で担当していた事業というのは、日本の大学で学ぶ途上国出身の留学生に貸与型の奨学金を無利子で支給するという内容であった²。将来、わが国と諸外国との架け橋となるような有

為の人材が、留学先である日本の大学で勉学に励む際、出来るだけ経済的な苦勞をすることのないように、という意図で始められた事業であり、外務省と JICA（国際協力機構）が事業資金を提供し、国連が実施主体としてその実務を担うという図式、役割分担であった。

筆者は国連側のプログラムオフィサーとして当該事業を遂行し、事業の開始から事実上の終了までの8年間に、百を超える本邦大学の数百名の教職員（ほぼ全員が日本人）と話をする機会があった。筆者は彼らに対して、当該事業の全予算が日本政府からの、いわゆる政府開発援助(ODA)から支出されていること、よって当該事業は教育事業であると共に、政府の外交政策の一環でもあることを毎回最初に伝えることにしていた。その結果、どの大学の教職員も、教育事業としての性格については正確に理解してくれた。

しかしながら、留学生のために奨学金を貸し付け、そのスケジュールを管理するという行為が、わが国における外交政策の一翼を担っているという点については彼ら教職員の間で戸惑いも大きく、ほぼ例外なく十分な理解が及ばないように見受けられた。当時最も多かった大学関係者からの質問は、大学を補助する事業なのに、どうして文部科学省ではなく外務省から予算が出ているのか、というものであった。この質問に対して筆者がどのように懇切丁寧に答えても、当該事業の予算が ODA の一部であることに對して特に大きな感慨は持てないようで、自らが外交の当事者なのだという意識は言うまでもなく希薄であった。

（2）本稿の目的と構成

そこで本稿では、教育がかつてないほどグローバルな広がりを見せる今、そしてそれとは正反対の自国第一主義という声高な主張が同時に存在するという、大いに矛盾した現状において、外交と教育との不可分な関係性について改めて考えてみたい。具体的には、主として次の三つの事例を取り上げる。

まず、最初に紹介する日本-サウジアラビアの事例は、国と国との関係が良好で、今まさに発展していこうかという時期の、希望に満ちたストーリーである。続いて紹介する米国-イランの事例はその逆に、外交関係が後退または停滞期にある場合特有の、堪え難い苦痛と困難に満ちたストーリーである。

そして、最後に紹介する事例では、留学（生）政策という枠をひとまず離れ、少し異なった視点からグローバル化時代における望ましい大学のあり方について考えてみたい。

2、外交関係発展期の教育協力：日本-サウジアラビアの事例

（1）国王来日で知るサウジアラビアの教育課題

2017年3月、サウジアラビアのサルマン国王が来日した。サウジの国王としては実に46年ぶりという歴史的訪問だったことに加え、訪問団自体が政府の閣僚や他の王族を含む千人以上の超大型とい

うこともあって、訪問の数日前からマスコミによる恰好のニュース素材となったことは我々の記憶に新しい。

この訪日の目的は、経済の過度な石油依存からの脱却、政治・安全保障分野の過度な対米依存からの脱却を同時に目指すサウジが、日本に対して正式に支援を要請するためと一般には受け取られている。実際、国王訪日期間中にわが国政府との間でまとめられた協力文書「日・サウジ・ビジョン 2030」では、インフラ整備などの9分野で両国の具体的な協力関係が明記されることとなった³。

当該9分野の中には、両国の教育関係者が揃って注目する「文化・スポーツ・教育」も8番目の項目として含まれている。さて、その内容は一体どのようなものだろうか。残念ながら本稿執筆時点では、日本からサウジへの教育専門家の派遣という程度のことしか公式には判明していないものの、今回の「日・サウジ・ビジョン 2030」の土台となった、サウジ独自の国家戦略「サウジアラビア・ビジョン 2030」を見てみることで多少の、しかし確度の高い類推は可能である。

例えば同ビジョンの「教育」の項を見てみよう。そこでは、大学生の専攻分野と社会の需要とのミスマッチを解消すること、続いて国内5大学の世界大学ランキング上位200位以内への昇格などという目標が列記されている。このことから、2030年までのサウジにおける教育課題として、高等教育分野の問題解決を国王及び同国政府が強く望んでいることが窺える。

(2) サウジ国王の来日が教えるもの

今回のサウジ国王来日は、我々日本の教育関係者に次の二つのことを教えてくれる。第一に、教育、とりわけ高等教育と外交との不可分な関係性である。何しろ、遠く離れた中東地域から、高齢の国王自ら46年ぶりに日本を訪れ、サウジー国では解決できない教育課題への支援をわが国政府にわざわざ要請したわけである。こうしたトップ外交は多くの場合、主要なマスメディアが報じる注目度の高いニュースになる。実際のところ我々教育関係者もそのような報道を通じて、普段はそれほど強く意識しないサウジアラビアという、地理的・文化的には遠い国の教育課題に目を向け、その概略を知ることが出来たのである。

しかも今回のトップ外交では、日本だけでなく中国やインドネシアといった国々もほぼ同時に訪れている。つまりサウジアラビアとしては、自国の教育課題解決のために、アジアの国々からいかに魅力的な協力メニューが出てくるか、互いに競争させようという隠れた意図があるのであろう。実に高度な外交テクニックだと感嘆する。

筆者は過去の論考で、**教育外交**という独自の概念を提唱した⁴。教育を外交という視点から、また外交を教育という視点から見ることで、普段は意識しない、両者の不可分な関係が明らかになると考えたからである。用語自体は筆者の造語であり、その定義は、「教育を目標、手段及び対象とする事象や問題の中で、その解決にあたって外交が大きな役割を果たす際、必要な知識や考え方、スキルの総称」

というものである。今回のサルマン国王の行為はまさにそれを地で行くものであろう。

国王来日が我々に教えてくれるもう一つの貴重な教訓は、些か自虐的ながら、日本の高等教育にはまだまだ海外にとって魅力的に映る高度な要素があるという事実である。つまり、サウジアラビアは日本に多くの留学生を派遣している数多の発展途上国と異なり、経済的には世界でも有数の豊かな国であり、それに見合う教育システムを国内に展開していなければならないはずである。そのように富裕な国が日本に期待してくれている。この事実は、日本が現在有する科学技術や研究の大いなる蓄積が、短期的な経済的成功のみでは決して獲得できない、ソフトパワーとしての優れた価値を持っているということの証左であろう。我々はこうした重い責任を今一度肝に銘じなければならない。

(3) 外交関係発展期における政府の主導的役割

幸いなことに、日本とサウジの間には現在大いに憂慮すべき外交的懸案もなく、文化的・歴史的な軋轢もない⁵。いわば、どのようなデザインを描くことも可能な白紙の状態と言って良い。そこへ、今回の国王来日である。外交関係が今まさに発展しようとするこのような位相 (phase) では、両国の政府が互いに主導的な役割を演じる。

例えば教育関連では、サウジアラビアから日本への留学生が増えるのではないかという期待が生まれよう。日本学生支援機構が実施した外国人留学生在籍状況調査によれば、2016年5月現在、日本で学ぶサウジ出身の留学生は533人を数えるのみで、万単位の中国人留学生に比べれば決して多くはない。しかも直近3か年で見れば、2014年の605人から2015年の587人、そして2016年の533人へと留学生数は残念ながら年々減少傾向にある。

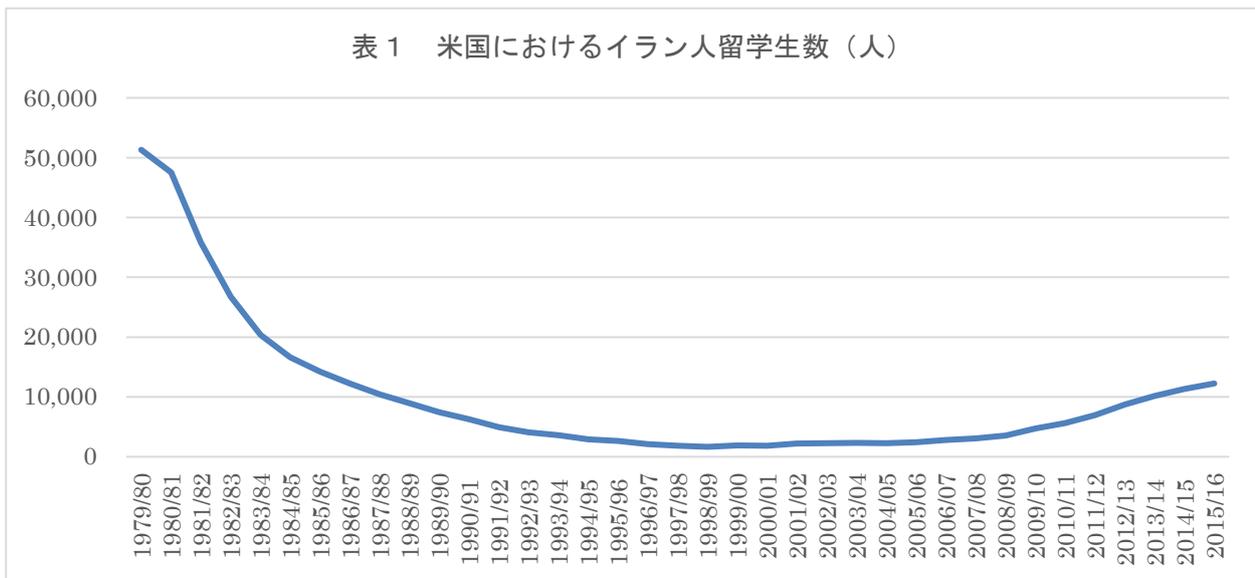
こうした中での国王の来日は、現状の悪い流れに楔を打ち、留学生増加へと転ずる正のドライブとして作用するのではないか。そして、日本政府も積極的にその後押しをするのではないか。そのような見方が生まれるのはごく自然な流れであり、決して不思議ではない。筆者自身も現時点ではそのように予想する一人であり、実際、数年後にはそのような好ましい状況が生じている可能性は高い。

しかし、我々は知っている。かつて、日本と中国及び韓国との間にもグローバル化の進展を予感させるこうした新たな時代の到来と、蜜月の時間があったことを。そして現在、歴史や領土などを巡る様々な問題によって、日本とこれら二国との外交関係は後退または停滞し、これら二国からの留学生受け入れ数もそれに呼応するかのように減りつつあることを。教育と外交の不可分な関係が負の方向に働き、両国政府が主導的な役割を果たせなくなってしまうような危機に、我々はどのように備えなければならないのだろうか。次章では、米国とイランとの関係史から、その答えを探ることにする。

3、外交関係後退もしくは停滞期の教育協力：米国-イランの事例

(1) 米国におけるイラン人留学生数の推移

Institute of International Education (IIE)の統計によれば、2015/16年度、米国で学ぶ留学生の数が史上初めて100万人を突破した。留学生の出身国・地域別で見た現在の派遣国第1位は中国であり、その数は328,547人という途方もない値である。これほど巨大な数値ではないものの、1980年代には日本も同等の位置を占めたことがあり、さらにそれ以前の1970年代にはサウジと同じ中東の大産油国イランが第1位の留学生派遣国であった。



出典 IIE の Open Doors 統計から筆者作成

教育と外交の不可分な関係を知る上で、米国とイランの関係史を見ておくことは極めて興味深い。両国の関係ほど毀誉褒貶の激しい例は珍しく、その具体例は中東研究の泰斗である高橋和夫（2013）の著書『イランとアメリカ 歴史から読む「愛と憎しみの構図」』に詳しい。高橋によれば、イランと米国の外交関係が始まったのは、イランがロシアに苦しめられていた約1世紀前、米国の支援を求めたことがその嚆矢とされる。

しかし米国は、英国と共謀してクーデターを起こすなど、自らを頼るイランを度々裏切る。そのため、上記で述べたようにイラン人留学生数が第1位となった米国-イランの蜜月時代も確かにあるものの、2003年のブッシュ政権による「悪の枢軸」指定により、互いに戦争も辞さないといった最悪の時代も経験している。両国の関係は70年代後半から様々な局面を経て年々複雑化し、その間、イランの人々の心には米国に対する憧れや尊敬といった正の感情と共に、裏切られたという負の感情も同時に宿ることになったという。この点、日本と中国、韓国の間における互いの複雑な歴史的視点、或いは国民感情と相通じるものがあるように思える。

(2) 逆風下でも続いた両国関係

直近 50 年に限れば、米国とイランとの関係は蜜月時代よりも離反の時代の方が長い。実際、本稿を執筆している 2017 年 3 月時点でも、イランは米国の指定するテロ支援国家の一つである。けれども、そうした時代であるからこそ、逆に「寛容」や「自由」といった米国の本質的な価値観及び特徴の実践を垣間見ることが出来る。

例えば前述の高橋は、「アメリカとイランの政府間関係の悪さにもかかわらず、両国間には驚くほど密な人的交流がある」という。実際、表 1 を見れば明らかなように、米国はイランとの対立の時代にも多くの留学生を受け入れており、両国関係がどれほど悪くなっても、米国で学ぶイラン人の留学生数が絶えたことはない。IIE 統計による留学生の出身国・地域別の順位で言えば、イランからの留学生数は全体の 15 位前後を保持していた期間が長い。先に述べた「悪の枢軸」時代でさえ、二千人を超えるイラン人留学生が米国で学んでいたという事実は重い。

このような努力の結果、イランには知米派の人材が時代を超えて継続的に育成・供給されてきた。そして 2013 年、イランに親米派のロウハニ大統領が誕生することで両国関係がいざ再び快方に向かおうかという時、政府閣僚などイランの新たなリーダーとなったのはそうした知米派の人材なのである。例えば、外務大臣となったモハンマド・ザリフは、かつて米デンバー大学に留学し、国際法の博士号を取得した人物である。

(3) 外交関係後退もしくは停滞期における大学の主導的役割

日本とサウジの例を持ち出すまでもなく、一般的に外交関係が良好な場合には、誰しも明るい未来を夢想する。他方、米国とイランのように関係が悪化した場合にはどうしてもその正反対のエネルギーが作用し、極端な場合には相手国との断交さえ厭わないといった偏狭な国家主義へと突き進む危険性さえある。しかし想起すべきは、外交関係の位相は日々刻々と変化し、昨日良かったものが今日は悪くなり、明日はまたその逆という合従連衡が頻繁に繰り返されてきたのが人類のこれまでの歴史なのだという冷徹な事実である。そして、グローバル化の進展は、そうした反転のスピードをさらに速める可能性がある。

つまり、米国におけるイラン人留学生数の推移は、1) 外交関係が悪い時こそ、次に良くなった時のための備えが必要だということ、だからこそ、2) どのような逆風下でも小さな灯を決して消さないこと、という二つの貴重な教訓を我々に与えてくれる。21 世紀に入って、米国におけるイラン人留学生の数が見事に上昇に転じ、2015/2016 年には留学生の出身国・地域別で見た順位でも、かつての 15 位前後から全体の第 11 位へと上昇したのは、こうした努力の賜物であろう。

米国におけるイラン人留学生の受け入れという点で、重要な役割を演じたのは言うまでもなく米国の大学群である。「政府間関係の悪さ」をそれはそれとして一旦脇に置くことで、つまり、良好な外

交関係を築けない政府にかわって、これら大学が将来の外交関係発展のための礎を営々と築いて来たと言って良い。現在、わが国は中国や韓国との間で外交上の困難な懸案を抱えているが、我々教育関係者が学ぶべき点は、まさに米国（の大学）が長年実施して来た、こうした多層的な外交姿勢ではなからうか。政府は政府、大学は大学、である。

4、グローバル化時代に輝く大学：米コロンビア大学の事例

（1）グローバル化時代の大学に求められるもの

さて、我々はこれまで、教育外交の二つの側面を見てきた。一つは、外交関係が良好な場合にはしばしば政府が主導的な立場を演じ、政策目的としての留学生獲得を粛々と進めていく傾向。二つ目はその逆に、外交関係が停滞している場合、教育機関である大学が政府にかわって主導的な役割を發揮できる、という可能性である。いずれの場合も、留学生の獲得はいわば「目的」であった。

しかしながら、留学生の獲得やその数の増加が単なる「結果」である場合もある。例えば、国の魅力、大学の魅力が増した時、そうした国や大学で学びたいと思う留学生は自然に増えるだろう。筆者はかつて、留学生獲得のための海外広報戦略のあり方を論じたことがある⁶。しかし、大学自体が大きな輝きを放っていれば、特別な広報をしなくても留学生は自然とそこに集まるだろう。横田（2006）らは、大規模な調査によって日本の大学に国際化のためのビジョンや戦略がないことを明らかにしたが⁷、たとえビジョンや戦略がなくても、極論を言えば、日本やそこにある大学が十分魅力的ならば、留学生は来るだろう。

つまり、留学生をどのように獲得するかという戦略や戦術ばかりに捉われていては、教育・研究機関としての大学の重要な本質を見失う。そこで、最後の章では留学関連の話題から少し離れ、グローバル化時代に輝きを放つ大学とはどのような大学かという、より本質的な問題について考えてみたい。

結論から先に言ってしまう。グローバル化時代の大学に求められるのは、ある種の強固な覚悟ではないかと筆者は考える。大学としての信念に基づいた、これだけは絶対譲れないという矜持のようなものと考えても良い。以下に示すのは、その象徴的な事例である。

（2）米国の大学と表現の自由

2007年9月、イランのアフマディネジャド大統領（当時）は、米国のある大学で講演を行った。ポスト9.11とも呼ばれた対テロ戦争の高揚感がまだ残っていた当時、米国とイランは核や人権の問題を巡って激しく対立しており、同大統領自身も反米的な色彩の濃い強権的なリーダーであった。

しかし同年、その大統領が国連総会に出席することを理由に珍しく米国の地を踏む。当然、米国や世界のメディアが彼の動向に注目したが、数多くの反対を押し切ってこの悪名高い大統領に公の場での発言の機会を与えたのは、米国有数の名門と言われるアイビーリーグの一角、コロンビア大学（二

ューヨーク市)であった。「俺とお前は意見が違うが、お前が意見を言う自由は俺が命を賭けて守る」という民主主義及び自由主義社会の伝統を実践したのである。

当日は、同大統領の受け入れにさえ反対する多くの学生や群衆が大学の周囲を取り囲み、一時騒然とした雰囲気となった⁸。同大学のおかげで、アフマディネジャド大統領はイランの立場について米国民に直接語りかける機会を得たものの、「イランの女性は世界最高レベルの自由を享受している」「イランにホモセクシャルはいない」など、人権問題に対する挑戦的な言辞を吐き続ける同大統領に対して、聴衆からは激しいブーイングが浴びせられた。

また、同講演の実現を主導し、当日の司会まで務めたコロンビア大学第19代学長リー・ボリンジャーは、アフマディネジャド大統領の登壇に当たり彼を「独裁者」と侮蔑的に紹介した。つまり、同大統領の講演にあたっては、聴衆の反応も含め決して友好的な雰囲気が醸し出されたわけではない。それでも、同大が当該講演会の開催に踏み切ったのは、「自由」という米国のシンプルだが実現困難な国家理念を、大学という組織が主体的に体現しようとしたからであろう。筆者はここに大学としての覚悟を見る。同大はこの時、在学生や世界中の卒業生に向けて大学としての意図や目的を認(した)めたメールニュースを一斉に配信している。

アフマディネジャド大統領が米国の大学で講演し、激しい拒否反応を受けたというニュースは、本国イランにも配信された。イランの若者には、米国の大学が持つ最重要の価値が十二分に伝わったのではないだろうか。先に紹介した表1を改めて眺めると、おそらく偶然であろうが、この出来事のあった2007年あたりから米国へのイラン人留学生数の上昇カーブが急激になっているようにも見える。仮にそうであったとすれば、米国がイランでの留学生獲得を「目的」に掲げ、そのための広報を展開したからではなく、コロンビア大学が示した自由主義社会の矜持に、イラン人の若者が賛意を示した「結果」に過ぎない。

筆者はふと思う。仮に日本で同じような事態が起こった場合、大方の世論に反してでも、表現の自由を守るためにはリスクを恐れず、自ら正義を貫く大学が一つでも現れるだろうか。毅然とした態度によって世界の、そして多くの若者から尊敬を集める、真にグローバルな大学や大学人が果たして登場するだろうか。教育のグローバル化が際限なく進展する反面、過度に保守的な主張も同時に跋扈する矛盾に満ちた現代において、我々教育関係者にまず問われているのはそうした揺るがぬ覚悟ではないのかと。

そして今、米国がかつて示していた寛容や自由の伝統に、残念ながら変化の兆しが現れている。その象徴は、2017年1月、第45代大統領に就任したドナルド・トランプ氏による施政である。特に、就任直後の大統領令によるイスラム教の国々(人々)を対象とした入国拒否騒動は世界を驚かせた。一部の州や政府機関は憲法違反だと訴えて反発しており、本稿を執筆している現在も予断を許さない状況が続いている。

新大統領による対イスラム諸国への偏狭な外交方針は、中東地域から米国への留学を希望する有為な人材に対しても早晩影響を及ぼし始めるだろう。トランプ大統領自身、イランへの敵視を日に日に強めているとの報道も多い。

教育のグローバル化を押しとどめようとするかのようなこうした流れに、米国における多くの大学人が声を上げ始めている。これまで世界をリードしてきた、米国の多様性や多層性が試されようとしている現状に、我々日本の教育関係者として無関心ではいけない。

¹ 2017年3月時点

² 本誌2009年9月号の拙稿「貸与型奨学金を留学生の生活支援に～国際連合大学・私費留學生育英資金貸与事業（UNU-FAP）の6年～」等を参照

³ 2017年3月14日の各紙報道

⁴ 大西好宣（2014）「教育外交と留学生政策：米国とイランとの関係を参考に」『留學生教育』第19号、pp. 1-11.、留學生教育学会

⁵ 但し、サウジアラビアの人権問題を指摘する声は古くからある。

⁶ 大西好宣（2015）「実験装置としてのグローバル30-大阪大学インターナショナルカレッジにおける広報及び入試の経験から-」『多文化社会と留學生交流』第19号、pp. 43-56.、大阪大学国際教育交流センター

⁷ 横田雅弘・坪井健・白土悟・太田浩・工藤和宏（2006）『岐路に立つ日本の大学-全国四年制大学の国際化と留學交流に関する調査報告-』文部科学省科学研究費最終報告書

⁸ 当時のCNN報道など

【論考】

日本留学希望者を対象としたMOOC「Studying at Japanese Universities」の開講後の展開について

-定性的な側面に焦点を当てて-

The Progress of the “Studying at Japanese Universities” MOOC
for Students Aiming to Study at a Japanese University:
Focusing on Qualitative Aspects

東京大学大学院情報学環特任研究員 高濱 愛

TAKAHAMA Ai

(Project Researcher, Interfaculty Initiative in Information Studies,
The University of Tokyo)

東京大学大学総合教育研究センター特任講師 藤本 徹

FUJIMOTO Toru

(Project Assistant Professor, Center for Research and Development of Higher Education,
The University of Tokyo)

キーワード：MOOC、外国人留学生獲得、グローバル化

1. はじめに

日本留学希望者を対象としたMOOC「Studying at Japanese Universities」が2016年9月に開講してから、約半年が経過した。これは、東京大学がグローバルMOOCプラットフォームのコーセラ(Coursera)で提供した大規模公開オンライン講座(Massive Open Online Course)の1つである。無料で世界のどこからでも常時受講できる点に特徴があり、外国人留学生獲得や留学準備教育の充実を目的として提供されているコースとしては、日本初の試みであると考えられる¹。本コースの開講に際しては、本ウェブマガジンの2016年9月号に、開発の経緯や概要などを掲載していただいた通りである(高濱・藤本、2016)。開講後およそ半年が経過し、世界各国のコース受講者数は約6,000名に

¹ 留学生を対象としたMOOCとしては、例えば日本語教育を目的とした「NIHONGO Starter」(国際交流基金日本語国際センター、2016)等が既に提供されている。

達して現在も順調に増え続けている。オンラインのコースページ上において受講者同士で様々な交流が行われるなど、興味深い動きが数多く見られるようになった。加えて、増加していくコース修了者への対応も求められるようになったため、受講者サポートをさらに拡張させるべく新たな取り組みにも着手することとなった。

そこで本稿では、コース開講から現在までに見られた注目すべき多様な展開の中から、定性的な側面に焦点を当てて報告する。具体的には、コース内のディスカッションフォーラム(Discussion Forum)等における受講者の反応や交流の状況、ティーチングアシスタント(TA)たちの活動、そして修了者向けの継続支援体制の整備、の3点に焦点を当てて報告する。これにより、主に受講者やTAといった留学生の視点から、外国人留学生獲得と留学準備教育の充実という本MOOCのねらいがどのように達成されつつあるのかについて、事例を元に考えていきたい。

2. ディスカッションフォーラム等における受講者の反応や交流の状況

本コースは、表1の通りウィーク1からウィーク4までの全4週で構成されている。週ごとに、学習時間の目安として2~3時間程度のビデオ視聴やクイズ、相互評価レポートなどの学習課題が提供される。加えて、コース内には、ディスカッションフォーラムと呼ばれる質問・意見交換等交流の場が設けられており、他の受講者やコースTAとコミュニケーションをとりながら学習を進めることができるようになっている(図1)。このフォーラムへの投稿は任意であるが、各週の学習内容に沿った問いかけに応える形で投稿することが奨励されている。投稿はテキスト形式で表示され、興味を持ったスレッドを自由に見たり、他の受講者と交流したりすることが可能である。たとえば、ウィーク1では自己紹介やビデオへの感想のやり取りを中心に、これまでに約2,400件が投稿されている。

表1. MOOC「Studying at Japanese Universities」の構成

各週のテーマ	学習内容
Week 1: Your First Step to Study in Japan	Videos Readings Practice Exercises Week 1 Quiz Peer-graded Assignment: Why Japan? Review Your Peers
Week 2: Understanding the Process	Videos Readings Week 2 Quiz Peer-graded Assignment: Find your target program Review Your Peers
Week 3: Student Life in Japan	Videos Readings Week 3 Quiz
Week 4: Moving Forward	Videos Peer-graded Assignment: Planning to study in Japan Review Your Peers

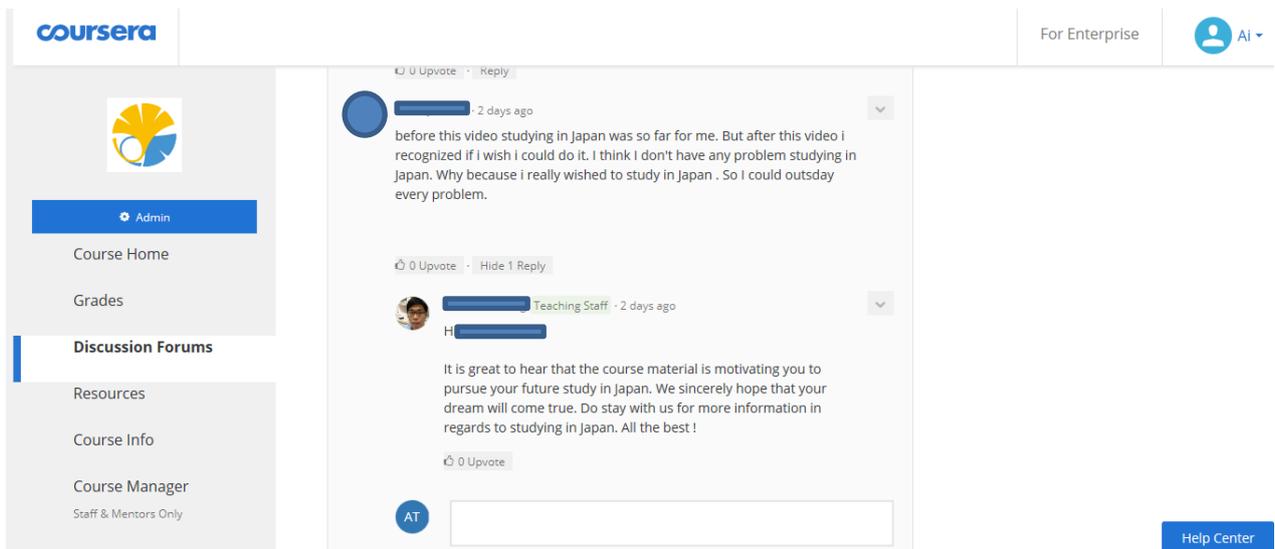


図 1. ディスカッションフォーラム（ウィーク 1 における受講者と TA とのやりとりの例）

以下に、ディスカッションフォーラムにこれまで投稿されたコメントややりとりの中から、とりわけ本コースにおいて提供されている留学準備教育および留学生サポートの実情をよく示していると思われる事例を紹介する。本コースは、留学生指導・相談等の留学準備教育をオンライン上で提供している点において先駆的な試みであるため、コースでの交流状況を広く公開することは、一定の留学生教育上の意義があると考えられる。紹介にあたっては、英文法の面から誤りと思われる部分も原文に忠実に記したが、プライバシー保護のため、一部の語句を伏せ字または類似の語彙に置き換えて示す。コメントは大部にわたるため、掲載にあたりその一部を省略した。なお、コメントの末尾の括弧内に該当するウィークと投稿されたセッション名²を記した。

まず、ケース 1 は、最終週にあたるウィーク 4 に、受講者 A から寄せられたコメントである。コースのビデオで留学生たちが「日本を選んだことに後悔がない」等と語っていることを見て、希望とやる気が湧いたことが示され、受講者 A が日本留学の決意を固めている様子が読み取れる。

<ディスカッションフォーラム ケース 1：コースにより日本留学への意欲を向上させた受講者 A のコメント>

受講者 A : *Hi, everyone,*

The topics discussed in the videos of this week bring us motivation and hopes. Every student in the video say their choice for Japan was great and they have no regrets. Although all challenges, they explain us that living and living abroad make themselves to grow

² 本コースは、約 1 か月ごとにセッションが更新される形式を導入しており、セッションの切り替えごとに受講者層も入れ替わる。2017 年 3 月現在、計 7 回のセッションを提供した。

professional and individually. I believe it is life-worth experience, don't you agree? (中略) I am determinate to do my post-graduation in Japan. Let's go for it!

(ウィーク4、セッション2より)

次に、ケース2では、複数の受講者（受講者B、CおよびD）とTA1名との間で、質問や建設的な意見が活発に交換されている。はじめに、受講者Bからの「研究計画の書き方や指導教員とのコンタクトの取り方、奨学金について心配である」という投稿について、まずTAが研究計画を書く上で大切だと思うことや、自分自身の経験をシェアしている。続けて、同様の悩みを持っていたという、他の受講者CとDもスレッドに参加し、TAのコメントに感謝の弁を述べたり自分の知っていることを共有したりする等、インタラクティブなコミュニケーションがさらに展開している。

<ディスカッションフォーラム ケース2：フォーラム上で受講者B、C、DとTAが出願準備に関して活発に情報交換・共有を行っているスレッド>

受講者B: (前略) My main concerns is how to write a research plan, as I'm looking to apply for a master's degree, and how to contact the professors. Moreover, I'm also concerned of getting a scholarship.

TA: Hello 受講者B, we appreciate your comment and the feedback. We will take it into account for further improvement of the course material. Regarding your question, I think the main goal of a research plan is to show that you have a clear objective and that you are capable of taking the required steps to achieve this particular result, so it is important that you take the time to think it through and convey in an adequate manner your ideas.

As for contacting the professor, my experience can be used as an example. After some internet searches, I wrote to a couple of professors stating the intentions I had of studying in Japan and briefly described my research proposal and how the research areas they were currently working in were related to it, (中略).

So, I would encourage you to try to first organize your ideas, write a draft of what do you want to do in Japan (and where) and try to contact professors with a solid proposal (don't give up if they don't answer and never ever forget to be polite!), then use their feedback to improve on your research plan. Good luck! :)

受講者C: TA, let me complement your reply. I consider writing a research plan really difficult. It requires time and previous experience. (以下、研究者とのつながりに関する質問に関する部分を省略)

受講者B: *Thank you very much for your answer TA! I think it would be of great help for those that are applying for Master's or Doctor's degree (以下、日本の大学のウェブサイトにて英語で書かれた情報を見つけにくいという悩みに関する部分を省略)*.

受講者D: *This has been a really good conversation and full of Information, thank you guys! The embassy in (国名) usually recommend us not to contact the professors before having the acceptance letter because they are really busy. I imagine that is due to the high number of applications (and the small number of scholarships) since most of the students that make contact won't pass. (以下、大学教員へのコンタクトに関する質問を省略)*

受講者B: *Well, in my case I'm not interested in a scholarship, but the Japanese universities admission procedure requires me to find an adviser anyway...*

TA: *Thank you all for the replies, I will answer below:*

受講者C (に対するTAからの回答) : *Yes! I completely agree with you that writing a good research plan requires time and should be done carefully, good news is that a quick online search will help finding plenty of information and tips about that. (以下、受講者B、C、Dの質問に関するTAからの回答を省略)*

(ウィーク2、セッション2より)

続いて、ケース3は、ウィーク2の講義ビデオへの「Share Your Thoughts (考えをシェアしよう)」という課題に対する、受講者Eからの投稿である。受講者Eは「世界が一つの村であると考えられるようになった現在、(中略)将来成功するために価値のある場所を選んで学ぶことが大切であると思う。この点において、日本は教育の質の観点から最高の場所だと思う」と述べている。この受講者は、以前は日本留学においては、言葉が障壁であると考えていたが、現在ではその考え方も変わり、将来は日本で博士課程に進むことを検討している。

<ディスカッションフォーラム ケース3: コースでの学びを通して受講者Eが日本留学を決意したことを表明したコメント>

受講者E: *The topics discussed in the video largely focus on the application procedure and admission requirements in Japanese educational institutions. This world is a global village in view of frequent trade among countries, rapid financial flows across the borders, and quick developments in information technology. Now the students have better opportunities to study any subject anywhere in the world. Keeping in view significance of time, one must prefer a place where he or she can become valuable after studying and will be able to live*

a successful life. Given this context, Japan is the best place in terms of quality of education. With best resources academically and practically, a student can easily satisfy himself by getting making advancement in the field of knowledge. I have no concern while studying in Japan.

Earlier there was a language barrier but now this is almost over now as more and more Japanese students speak English and interact with foreigners easily. I am planning to study PhD in (専門分野) from Japanese educational institutions.

(ウィーク 2、セッション 3 より)

さらに、ケース 4 は、受講者 F からの「このコース内容と日本文化が大好きだが、現在在籍している大学が有名でないため、日本のトップクラスの大学に入れるか心配だ」という質問に対する TA の返事である。TA は、この受講者に対して「大学の名声だけを考慮して出願することはしないほうがよい。自分に合うコースや、自分にとって住みやすい街はどこか等、多角的な視点から検討すべきだ」と助言している。そのうえで、「よい成績や研究計画があれば、チャンスはあるはず。変えられないものにフォーカスせず、自分のできることにフォーカスしてください」と結んでいる。

<ディスカッションフォーラム ケース 4: 自分の在籍している大学が有名でないことから日本留学への影響を懸念する受講者 F に対して、TA が教育的な助言をしているスレッド>

受講者 F: I can't love the topics more. The only thing I concern about is whether the Top Japanese university will give me an offer, because the university I am studying in is not famous. I really love Japanese cultures.

TA: Hi 受講者 F, thank you for your comment! Great to hear from you, and we're glad to hear you like the content and that you're a fan of Japanese culture!

While the 'fame' of a university is worth considering when applying, I certainly would not advise that you pick a university based on its level of 'prestige' alone. It's important to consider a wide variety of factors, such as finding a course that really suits you, finding a city that you would be happy to live in, what is the best for you financially. Of course, the recognition of the name of the university is worth considering, but it's not the only thing to keep in mind (or at least in my opinion).

(中略) Provided you have a good academic record and good study plan, you should have a chance. Of course, coming from a 'famous' university probably helps to some extent, but don't worry about what you can't change and just focus on what you can work on!

(ウィーク1、セッション4より)

これらディスカッションフォーラム以外に、受講者から受講後の感想やメッセージとして講師へ送られる「ストーリーズ (Stories: コーセラのコース管理システムで提供される担当講師へのコメント機能)」の投稿からも、このコースの受講者への影響が読み取れるので紹介したい。2016年のコメントの中で、受講者Gは「日本語を勉強して日本留学の夢をかなえたい」という希望・決意を記すとともに、コース受講ができたことに対する感謝の念を述べている。

<ストーリーズ ケース5: 日本留学の夢をかなえたいと語ると同時に、コース提供に感謝の言葉を述べる受講者Gのコメント>

受講者G: (前略) *I'm (国名) (学年) interested in studying a Literature undergraduate in Japan.*

At first, I decided to study in Japan, not only for having a great education level, but also because I want to honor my country and family. I was not sure how, but one thing I was sure about was that I was going to do my best to succeed. This year, I started attending to Japanese classes and hopefully, in 20XX, I will apply for the (奨学金名称) scholarship. I really want to study in Japan, specially in (大学名). I will do my best in order to accomplish my dreams.

All I have to say is thank you. Thank you a lot for having this course online so many students could take it as well, thank you for your time and dedication spent in this course and thank you for giving me hope and support to continue with my dreams.

PS: See you in Japan :)

総じて、ディスカッションフォーラムにもストーリーズにも、受講者からの学びに対する真摯な姿勢と熱意が伝わるコメントが寄せられている。加えて、TAたちも、受講者の気持ちに寄り添いつつ、教育的なメッセージを送っており、能動的・主体的な学びがコース上で展開されていることが分かる。

3. TAチームの編成とその活動

本コースでは、東京大学の現役の外国人留学生5名をTAとして雇用し、受講者からの質問等に迅速に対応できる体制を整えている。5名の内訳は、本稿執筆の時点で男性2名、女性3名であり、学部生1名、大学院生4名となっている。出身国は、ヨーロッパ、アジア、南米、オセアニアの各地域に広がっており、世界各国からの受講者のニーズに柔軟に対応できるよう、留学生のダイバーシティを

考えて採用した。TAたちの活動の主な目的は、コース受講者の学びの質・モチベーション・満足度を総合的に高め、日本留学を実現した「先輩」としての経験・知識を最大限に活用しながら、彼らの日本留学が実現するようにサポートすることである。コース開講の約1か月前から、TAチームを組織し、ミーティングやメール、Facebook グループ等を活用して、コース運営の在り方や TA 同士の連携方法などについて密に打ち合わせをしながら準備を進めた。開講後は、おおむね TA1 名につき週1日程度担当する形で、それぞれの専門分野、出身国等のバックグラウンドとチームワークとを活かしながら受講者からのコメントに対応している。前述したディスカッションフォーラムのコメントに見られるように、TAからのフィードバックは受講者にとって貴重な情報源であり、学習継続の励みともなっていることから、彼らの存在がコースの運営管理において非常に重要な位置を占めているといえる。

今回は、TAとしての活動を3か月ほど経験した留学生たちの経験を把握するために、2016年12月に筆者からメールでTA全員に送付して実施した簡易な聞き取り調査の結果から、彼らの留学生支援に関する姿勢をよく示しているものを抜粋して報告する。日本の大学における留学生支援としては、来日後にオリエンテーションやチューター活動等対面式で提供されるものが一般的だが、本コースではオンライン上で、かつ同じ立場にある留学生から提供されている点に特色がある。したがって、TAにはこれまでの活動を振り返ってもらうために、「TAとして面白い、喜ばしいと感じたこと」と「TAとして大変だがやりがいを感じたこと」の2点について、自由記述式で英語で回答してもらった。以下に、5名のTAをそれぞれTA1からTA5と番号で区別する形で、特に本コースによる留学生支援の特徴をよく表していると思われる回答を選んで記載した。

3.1 TAとして面白い、喜ばしいと感じたこと

下記のコメントでは、日々の活動の中で留学生の「先輩」としてのTAへの役割期待に対し、彼らもそのことを自覚し、やりがいや面白みを感じている様子が語られている。TA1は、「自分の日本留学経験やその知識を、他の同じ立場にある人を助けるために役立てられることが最もやりがいがある」、「他のTAが質問に答えるのを見るのがとても楽しい。彼らの回答のレベルや、ベストの回答をしようとする努力、そのほか自分の経験を役立てようとする気持ちに感動する」としている。また、TA2も「自分も日本留学前は情報不足で困ったことがあった。しかしTAとしての業務を通じて、自分自身の経験から、オンライン等では見つからないような情報を提供できることが素晴らしい」と感じている。

<TAとして面白い、喜ばしいと感じたこと>

(TA1): *The most gratifying part of the job is being able to use the knowledge and experiences I have gained regarding study abroad in Japan to help others who were in the same situation as I was in before. I am amazed by how easy it is for me to identify and see the very real*

'human' experiences of the learners, even though I don't meet them in person, because we share similar dreams and interests.

(TA1): Looking at the way the other TAs respond to questions fascinates me. I am constantly impressed by the level of detail and amount of effort they use to try and find the best, most accurate answers to the learners queries. I am always amazed by the very innovative and creative answers TAs come up with, as well as their willingness to share their personal experiences for the benefit of the learners.

(TA2): Prior to coming to Japan, I was once in the same position as many of the students who have/are participating in this course. The lack of information about certain aspects of life and study in Japan truly frustrated me when I was in the stages of applying to Todai. The overwhelming sense of insecurity and anxiety floods our minds as we can't find the answers we seek. However, through our work as TAs for this MOOC now, it's wonderful to know that we can provide them - from our own experiences and positions in Japan - with information they would not necessary be able to find online or in paper!

3.2 TAとして大変だがやりがいを感じたこと

TAの活動には楽しい側面もある一方、時には大変だと思われることもある。例えば下記のコメントで、TA3は「質問内容が広すぎても狭すぎても対応が難しい」と語っている。TA4は、「受講者の中には、TAに調べてもらったり答えたりしてほしいという人もいる。この場合は、いつもより大変だが、新しいことが学べる」と前向きに捉えている。さらに、TA5は、「受講者の質問の中には、難しいものもある。受講者のバックグラウンドが多様なため、質問の幅も広い。そのため、質問の学問的・文化的側面を理解することが必要である。さらに、受講者とのインタラクションを促進しつつ、デリケートな問題にうまく対処できるような、回答の技術も必要となる」と、困難な点を指摘するだけにとどまらず、TAとして求められる資質や技能について考察している。

<TAとして大変だがやりがいを感じたこと>

(TA3): Endorsing questions that are at the extremes. Either too broad, or too specific (i. e. when people ask if the engineering program is in English or if they are qualified for scholarships).

(TA4): Also I feel sometimes the learners need us to do online research on behalf of them and provide answers for the questions they have. We have to put some extra effort at those times but at the end of the day it helps me to learn new things which will be helpful when

recommending a Japanese University or answering such questions again.

(TA5): As mentioned earlier, some questions are in fact difficult to answer. As the learners come from various academic fields, regions and cultural background, diverse range of enquiries had been encountered. The TAs have to understand the fields of study/cultural aspects of the enquiries before attempting to answer the question. Furthermore, the TAs have to be aware of the answering technique such that it promote interactions among learners and does not provoke sensitive issues/ cultural aspects of learners from different background.

4. 修了者向けの継続支援体制の整備

最後に、コース修了者向けの継続的な支援体制について報告する。コースの修了者数が増えていくにつれて、彼らの修了後のサポートの必要性が認識されるようになった。例えば、コース修了者はコースページを利用しなくなるため、ディスカッションフォーラムでコミュニケーションを継続することが困難となる。したがって、コースの枠外で参加できる形で、日本留学に向けた受講者のオンラインコミュニティを構築していくことが望ましい。また、日本留学が実現したコース修了者にその体験や近況を共有してもらい、後から参加する受講者にアドバイスができる機会を提供することで、このコースを軸としたコミュニティ形成が期待できる。一方でコース運営上の負担を考慮すると、あまり大掛かりな体制を組むことは難しい。そのため、筆者らとTAらで実施可能な選択肢を検討し、試行的にFacebookページ「Alumni Coursera Studying at Japanese Universities (仮称)」を設置することとした。Facebookは世界的に普及しており利用者数も多く、原則実名登録で長期にわたり無料で利用可能であることや、管理がしやすいことを考慮した。運用方法としては、コース修了者に向けた情報をこのFacebookページで提供し、修了者からの質問や近況をメッセージで受け付け、TAから回答する形とした。このような体制をとることにより、修了者は参加することで、日本留学に関連した情報を継続的に得ることが可能となり、協力したい留学生や情報提供者の参加も得やすくなる。現在は運用準備段階のため、運用開始後の交流状況を見ながらコミュニティとして充実させたいと考えている。今後は、日本中の大学に在籍する外国人留学生が各大学の魅力や最新の情報等を発信・共有できるようにするなど、このコミュニティを軸としたさまざまな展開が期待できる。

5. おわりに

本稿では、MOOC「Studying at Japanese Universities」の開講後約6か月間の展開について、受講者やTAのコメントを取り上げながら、このコースに参加する留学生たちの経験的な側面について報告した。外国人留学生であるTAたちの貢献により、ディスカッションフォーラム等、コース内で受講者のコミュニケーションが活発に行われていることを示した。受講者たちの投稿内容からも、彼らが日

本留学を計画していく上で必要な情報を収集したり、学習意欲を高めたりしている様子が見て取れる。一方、それをサポートする TA たちも、日ごろの業務の中でお互いに協力し合いながらやりがいを見出し、多くのことを学んでいる。さらに、修了者への継続支援の必要性を認識し、Facebook ページ設置などの体制整備に向けて準備を進めている。これらの点から、このコースの目的の一つである留学準備教育の充実について一定の貢献を示しつつあると言える。

今後の課題として、以下のような3点が考えられる。第一に、MOOC の多様な受講者に対応したコースの充実が挙げられる。MOOC に共通する課題として、コース登録者数に比して修了者数の少なさが指摘されるが、コースを修了しなくても目的に応じて学びの成果を挙げている受講者も多いことがこれまでの研究で示されている（荒ほか、2014）。そのため、修了者数の増加だけを考慮するのではなく、部分的なコース受講でも得るものの多い、魅力的なコースを提供し続けていくことが大切である。例えば、これまでに集まった多様な留学生の声を反映して、受講者のニーズに対応できるように新たなコースビデオの制作などを計画している。また、現在は英語のみで提供されているが、スペイン語等などの需要の大きい言語にも対応した多言語化も検討を進めている。

第二に、継続的なコース運営を可能とするための TA チームの開発や環境整備が挙げられる。MOOC の受講者にとって、TA は実際に日本に留学している「先輩」留学生であり、彼らとの交流が留学意欲の向上や、留学準備の促進などにつながることを期待できる。そのため、優れた TA を継続的に採用して、質の高い対応を提供し続けられる体制を整備することが不可欠である。

第三に、コース受講者への継続的な支援体制の整備が挙げられる。現在は Facebook ページの設置による留学生コミュニティの形成を考えており、受講者の日本留学実現やその後の活動においてもつながりを維持できる体制を持つことが重要である。これにより、本コースのもう一つの重要なねらいである、外国人留学生支援に貢献していくことができるだろう。

最後に、この MOOC 「Studying at Japanese Universities」の提供により、日本における留学交流の充実に貢献し、より多くのコース受講者の日本留学経験が実りあるものとなるよう、コース関係者として一層力を尽くしていきたい。

引用文献

荒優・藤本徹・一色裕里・山内祐平(2014)「MOOC 受講者の多様性を考慮した教育効果分析観点の提案」『日本教育工学会大会講演論文集』743-744.

Coursera <<https://www.coursera.org/>> (2017年2月15日閲覧)

Coursera MOOC 「Studying at Japanese Universities」<<https://www.coursera.org/learn/study-in-japan>> (2017年2月15日閲覧)

藤本徹・高濱愛・荒優・一色裕里・山内祐平(2016)「日本留学希望者のための留学準備支援 MOOC の開

発」『日本教育工学会第32回全国大会講演論文集』963-964.

国際交流基金日本語国際センター (2016) 「JM00C 日本語講座「NIHONGO Starter」の開発と運用」『留学交流』2016年6月号、Vol. 63<http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/__icsFiles/afieldfile/2016/06/07/201606japanfoundation.pdf> (2017年2月15日閲覧)

高濱愛・藤本徹 (2016) 「日本留学希望者のためのM00C「Studying at Japanese Universities」の開発-M00Cを活用した留学生獲得と留学準備教育の展開-」『留学交流』2016年9月号、Vol. 66<http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2016/__icsFiles/afieldfile/2016/09/08/201609takahamafujimoto.pdf> (2017年2月15日閲覧)

【事例紹介】

文化学園大学のダブルディグリープログラム

-大学院英語コースを中心とした交流-

Double Degree Programs of Bunka Gakuen University:
Exchange at Graduate School English Course

学校法人文化学園理事・文化学園大学事務局長 **遠藤 啓**

ENDO Hajme

(Chief Administrative Officer, Bunka Gakuen University)

キーワード：ダブルディグリー、英語コース、グローバル化

はじめに

文化学園大学は、東京の副都心、新宿駅の南口から徒歩7分の地に所在する。学校法人文化学園が設置する学校であり、BUNKAの名称は、世界のファッション教育をリードする学校の一つとして、海外で広く知られている。

このため、海外の大学からの研究者の訪問や、海外の学生達の短期研修、海外業界団体の視察を受け入れるのは日常茶飯事である。外国人留学生数は、学生数の10%超を維持している。併設の文化服装学院では、20%を超えており、大学院段階では、学生数の3分の2以上を留学生が占めている。

ファッション教育は洋装教育が中心であるため、従来は東アジア諸国からの留学生が圧倒的に多かったが、後述のように本学の大学院に英語で学べるコースを設けたことにより、洋装の本場である欧米諸国からも、学生が入学してくるようになってきている。

併設の専門職大学院、文化ファッション大学院大学では、日本語で教育を行っているにもかかわらず、欧米の一流ファッション学校の学卒者が入学するようになってきている。

そのような中で、交流の申し入れを海外の大学から頂くことが多く、ダブルディグリーの覚書は、大学院レベルで3つの学校と交換している。

武漢紡織大学との覚書

中国湖北省にある武漢紡織大学は、現代の中国では唯一「紡織」の語を冠する大学であり、地域の繊維工業を支える大学となっている。本学は同大学の服装学院と交流を行っている。平成24年に相

互訪問の上、提携に合意したが、最初に具体化したのが大学院修士レベルでのダブルディグリープログラムに関する覚書であった。

この覚書では、まず、受け入れ人数は若干名とし、受け入れ大学が選考すること、一方で取得した単位は、他方の国内法規の認める範囲で認定することを定めた。

武漢は秋入学で、修士課程は3年間、作品制作と論文の両方が求められることから、武漢の学生がこのプログラムに参加する場合、武漢で1年半学んだ後、春に来日し、原則として1年半文化で学修し、作品を制作して文化の修士号を取得し、武漢に帰ってから半年で論文を仕上げ、武漢の修士号を取得し、3年半で全課程を修了するという制度設計とした。

来日する者の選考は、第2学期＝第1学年の終了時までに行い、合格者は第3学期から文化の学籍を取得することとして、1年半の日本滞在中で、修士に必要な2年間の在籍という要件を満たせるようにした。また、参加する学生は、第3学期の終了時まで、両大学院に対して研究題目を提出し、両大学院の承認を得ることとした。

文化の学生がこのプログラムに参加する場合は、2年間文化で学修して文化の修士号を取得した後、1年間武漢で学修して、武漢の修士号を取得するという方式だった。

学費については、滞在中の大学の学費を支払う、つまり、武漢の学生が文化にいる間は、文化の学費を文化に納めてもらう方式を採用した。

使用言語については、原則として、大学院所在国の公用語としたが、予想以上に言語の壁は厚く、両方の言語をマスターして、このプログラムに参加しようとする希望者は、現在に至るまで、現れていない。因みに、武漢との覚書は中国語と日本語で作成し、両方を正文とした。本学に、中国出身の職員がいたことが大きな助けとなった。

ダブルディグリープログラムに代わって実現したのが、武漢で学部2年以上を修了し、本学による選考に通った者が来日して、半年間、併設の文化外国語専門学校で日本語をブラッシュアップし、翌春に本学服装学部の3年次に編入学するプログラムで、平成26年9月から、毎年度10数名が武漢から来日している。なお、このプログラムは平成28年9月来日組が最後となり、平成29年9月からは、中国教育省の認可を受けて、本学が協力して実施する特別プログラム(入学定員100人)で2年間学んだ上で、本学の選考に通った学生が40名程度、編入学してくる予定である。

このように、武漢とのダブルディグリープログラムは紙上の存在に終わったが、この策定経験が後のダブルディグリープログラムの基盤となった。

大学院グローバルファッション専修

もう一つの基盤となったのが、大学院の英語コース、「グローバルファッション専修」である。同専修は、平成24(2012)年度、日本語を勉強していないが日本でファッションを学びたい学生のため

に、授業や研究指導を全て英語で行う専修として、生活環境学研究科の被服学専攻(博士前期課程)に開設され、1期生は2名が入学した。その後も、イギリス、米国、チリ、コロンビア、シンガポール、ベルギーなど、これまで本学への入学者が少なかった国から学生を得ている。

これら欧米等からの学生の多くはファッションデザイン領域に関心を有し、日本の伝統的なデザインや最新のデザインを取り入れて自らデザインして衣服を制作したり、日本のデザインそのものの研究を行ったりする者が多く見られる。これに対し、主として他の専修で学ぶアジア諸国からの留学生は、服装が人体の生理に及ぼす研究など、本学が一つの強みとする自然科学的な研究や、ファッションビジネスの研究を志向する者が少なくない。

日本語で学ぶ学生とは異なるニーズを有し、日本語で学ぶ学生に比較して発信力の強い本専修の学生らは、学内で、人数不相応の存在感を示しているが、この専修の存在が、この後のダブルディグリープログラムの構築に不可欠のものとなっている。

浙江理工大学とのプログラム

中国の浙江省にある浙江理工大学から、ファッション分野における交流の申し出があり、平成26年、副学長が先方を訪問した。包括的な覚書の交換後、協議を続けた結果、修士レベルでダブルディグリー覚書を交換することとなった。

この覚書でも、武漢の場合と同様、受け入れ人数は若干名とし、受け入れ大学が選考すること、一方で取得した単位は、他方の大学の国内法規の認める範囲で認定することを定めた。学費についても、学生が滞在中の大学の学費を支払う、武漢の方式を採用した。

浙江理工大学の修士課程は、武漢とは異なって2年半であったことから、どちらが派遣する場合も、2年半の課程で修了する制度設計が可能となった。

どちらから派遣する場合も、第1学期終了時までには受け入れ大学の選考を受け、その学籍を取得するとともに、指定された期日までに両大学に対して研究題目を提出し、その承認を得る。第2学期開始時(浙江から来る場合は4月、文化から行く場合は9月)から第3学期終了時までの1年間、受け入れ大学において学修し、所定の単位を取得する。第4学期から派遣大学に戻って、第5学期に修士論文を完成し、どちらかの大学で修士論文の発表を行う。修士論文の審査は、それぞれの大学で行い、審査の結果に関する情報は他大学に提供するというものである。

論文の発表については、理想を言えば、両方の大学で行うことが望まれるが、中国の場合、期日までにビザが出ないために学位が取れない、という事態も想定されるため、一方の大学で発表すれば良いこととした。学位審査に関しては、ダブルディグリーであってジョイントディグリーではないので、一方の審査は通過しても、他方の審査は通らないという可能性があることは、当然の前提としている。

浙江の覚書が武漢と異なるのは使用言語であり、受け入れ側の公用語または英語を用いることとし、

英語を選択肢に加えた。浙江理工大学は、欧米で学位を得た教員が多いことがその背景にあり、平成26年に交換したダブルディグリーの覚書は、英語で作成した。

1期生としては、平成27年4月に1名が来日した。この学生は、学部段階では本学大学院を修了した教員が指導していた学生であり、希望していた研究テーマも、服装が人体に及ぼす生理学的影響に関する研究であった。これは本学が強い研究領域の一つで、世界的にも誇れる研究設備を有している。この学生は、当該領域担当の研究室で受け入れ、帰国後、英語で論文を執筆し、平成29年3月に文化、浙江両方の修士号を取得した。

翌28年4月の来日を目指す学生は、一気に増加した。全員が英語での指導を希望していたので、グローバルファッション専修で受け入れることを前提に、書類選考のほか、スカイプによる面接を実施した。浙江の学生が答えようとすると音声に障害が生じ、なかなか思うに任せなかったが、ファッションビジネスを志望した2名を受け入れることとした。彼らは、この3月で文化での学修を終え、帰国して論文を作成する。

平成29年4月の来日を目指す学生は、8人になった。今回はQQという中国のアプリを利用して面接を試みたが、大きな改善は見られなかった。TOEFL等の英語試験が中国でも実施されていることが確認できたので、次回以降は、TOEFL等の成績を重視することを検討している。

面接を踏まえて検討の結果、3名に対して、文化での学修を許可することにしたので、浙江からの学生は、初年度1名、2年度目2名、3年度3名と増加してきたことになる。文化から浙江に行くことを希望する学生は、まだ現れていない。

ENSAD とのプログラム

フランス文化省所管のグランゼコールの一つである国立高等装飾美術学校(ENSAD)は、1767年にルイ15世から勅許を得たという由緒ある学校である。「国際ファッション工科大学連盟」というファッション系大学の国際組織があり、本学は発足当初から加盟しており、現在理事校の一つであるが、平成26年秋、その理事会がパリで開催された折に、筆者が訪問した。

本学の造形学部長が1960年代に1年間留学しており、その前年に久々に再訪していたこともあってか、予想外の歓迎を受け、学長から英語での学生交流の申し出を頂戴した。

その後の協議の結果、修士レベルのファッションデザインとテキスタイルデザインの分野で、ダブルディグリープログラムを設けることで合意した。フランス人としては異例のバカンスシーズン中のメール交換により、成文を得ることができ、平成27年秋に、覚書を交換した。これも英文である。この折衝の過程では、芸術学という研究フィールドを、ENSADの学長と共有する教員が文化にいたことが大いに助けとなった。

ENSADは5年制の国立の学校で、10のコースがあるが、学生数は700人と少数精鋭。入学試験の倍

率は20倍以上と聞く。卒業証書は、前期3年で学士、5年間で修士相当とされている。4年次の半分又は1年間を国外で研修することが義務付けられており、欧州内だけでなく、世界中の大学等に送り出している。この度は、パリのファッション界で活躍する人材を輩出している文化学園に、この二つの分野の学生を送り出すことにした訳である。

このプログラムでは、派遣するのはそれぞれ2名以内と人数を明記し、使用言語は、どちらの学校でも英語とした。5月～6月にそれぞれが選考した学生を相手側に提示し、合意が得られた者がこのプログラムに参加する。選考の対象になるのは、ENSAD側は今年4年生になるファッションデザイン、テキスタイルデザインの学生、文化側は修士課程に入学したばかりの学生で、修了作品の制作を目指す者ということになる。

9月にENSADの学生が来日し、1年間、文化で学修し、論文を執筆する。文化の学生も同時期に論文を執筆し、これを双方で評価する。所定の成績が得られた日仏の学生は、秋にパリに移り、1年間作品制作に没頭し、6月にパリで、修了作品によるファッションショーに参加し、ENSADの修了証書を得る。(文化の学位の取得は、9月になる。)したがって、ENSADの学生は2年間、文化の学生は2年半で課程を修了することになる。

学費に関しては、ENSADでは、学生が自校の学費を支払うという交流方式を取ってきた。ENSADは国立の学校で、年間の学費が10万円程度と、日本の私学とは大いに異なる。また、同人数の交換を想定していることから、このプログラムでは、例外的に、学生は原所属校の学費を支払い続けるという方式を採用した。滞仏中の文化の学生の学費については、通常の半額とし、2年分の学費で2年半の課程を修了できることにした。

第1期生としては、フランス側では2名、日本側では1名が合意され、平成28年9月にENSADの学生2名が来日した。1人はEC、1人はパリ市の奨学金を受けている。この2名は、1年間、他のグローバルファッション専修の学生とともに学び、論文を作成することになる。論文の審査にENSADの教員が来日することは難しいことになったが、修了時の作品の審査には、文化の教員を派遣する方向で検討している。

文化の側の参加学生のため、留学時の資金を確保するべく、複数の奨学金の申請を行っていたが、その後、経済的事情などにより、その学生は第1学年の途中で大学院自体を自主退学することになり、残念ながら、記念すべき第1期は、一方通行ということになってしまった。ENSAD側の学生は、3年間学んだ後で選考され、優秀な学生が来ている。これに対し、文化側の学生の選考は、大学院入学直後に行う必要があり、文化から派遣する学生の質と数の確保と、留学資金は、今後とも課題になると考えている。

終わりに

このように、武漢の覚書を踏まえてプログラムを構築し、グローバルファッション専修でダブルディグリーの学生を受け入れてきたが、同専修の中で2年の課程を修了する学生もいる。また、英語で博士論文の指導を受けることを希望する学生から相談が来ており、英語で研究指導が行える教員の数がボトルネックとなっている。大学のグローバル化推進のためにも、こうした教員の増員・確保が今後の課題となっている。

【海外留学レポート】

カナダのロンドンから
-ある経済学大学院生の留学記録-

From London, Canada:
Study Abroad Report by a Graduate Student in Economics

ウェスタン・オンタリオ大学経済学部博士課程 小野塚 祐紀

ONOZUKA, Yuki

(Ph.D. candidate in Economics, University of Western Ontario)

キーワード：博士課程留学、経済学

はじめに

私はカナダにあるウェスタン・オンタリオ大学経済学部博士課程に所属し、早いもので現在四年目になる¹。経済学をやっていると言うと経済成長や景気循環、株価や金利のことを研究していると思われることがほとんどだが、このようなことは私はまったくやっていない。経済学は社会科学に属しており、いわゆる「経済」のみに拘らず、広く人間の社会行動を分析する学問である。私が専門分野としている労働経済学、教育経済学では、賃金格差や労働供給、教育のリターンの分析などが伝統的に行われているが、その他にも様々なことが分析対象となっている。私自身は人的資本の特徴づけや男女間格差といったことに興味を持ち研究を行っている。

私は留学当初から日本学生支援機構(JASSO)の海外留学支援制度(大学院学位取得型)(旧名称:海外留学支援制度(長期派遣))を戴いており、その縁でこの海外留学レポートの執筆依頼を頂いた。本稿では、一経済学大学院生が、なぜそれまで所属していた日本の大学院を飛び出しこちらの博士課程に入ったのか、こちらでどのような生活を送っているのか、ということを中心に述べていきたい。

留学決意、留学先決定まで

私は学士号、修士号を一橋大学経済学部から取得し、博士課程二年目の夏にこちらへとやってきた。留学を決意したきっかけについて、他の方のようにかっこよく書ければいいのだが、残念ながらそれほどかっこいい理由はない。経済学の場合は、アメリカが現在中心であることや国際的な競争が激し

いこともあって、海外の博士課程に入ることは特に珍しいことではなく、私もそれに倣った感じではある。もちろん、ただ単純に他の人が留学しているから留学したわけではない。最近変わってはきたものの、日本人が伝統的に強い理論分野と比較して、私が専門としている労働経済学は日本では正直あまり人気がない。一方、北米に目を向ければ、労働経済学は花形分野で非常に活発に研究が行われている。「このまま日本にいて自分が自分として納得できる研究者になれるのだろうか」という不安を覚えていた私は、現状を変えるべく留学を決めたのである。

先ほど、現在の経済学を中心はアメリカだと書いた。そのため、なぜアメリカではなくカナダの大学院に入ったのかと思われる方もいるかもしれない。何を隠そう、私も当初自分はアメリカに行くのだろうと予想していた。一般に博士課程へ留学といった場合、就きたい教授に連絡を取り、許可ができればその教授の元に就いて研究をすることになるらしいが、経済学の場合は大きく異なる。一部ヨーロッパの大学でそのような制度が残っているが、アメリカ型のプログラムの場合には博士課程とはいえ入ってすぐに研究に取り掛かることはなく²、一年目、二年目と授業の履修が主体で、三年目以降に正式に専門分野を決め、指導教授を選択する。入試も他分野とは大きく異なっていて、可否には学部の成績もかなりの割合を占めてくると言われている。出願数も日本から留学する人の間では10校前後は当たり前で、どこに受かるか不確実性もかなり大きい。そのため、受かった大学の中から一番よさそうなところを選んでいくというのが現実である。私は推薦者の一人にウェスタン・オンタリオ大学（以下、ウェスタン）を薦めていただき出願したが、他にも多数の大学に出願しており、ウェスタンはそのうちの一つに過ぎなかった。

入試の結果が出そろい、合格した大学の中から私はウェスタンに行くことに決めた。決め手となったのは労働経済学の分野での教授陣の厚さである。ウェスタンの経済学部は決して大きなプログラムではないが、私が専門としている労働経済学では安定した層の厚さを誇っている。こちらでは教授の大学間移籍は激しいので、一人の教授に着目するよりも分野として強いプログラムを選ぶ利点は大きい。このようにしてカナダへの留学が決まったのである。

ウェスタン・オンタリオ大学での研究生活

以上のような経緯で留学に至ったウェスタンだが、当大学についてご存知でない方も多いかと思うので簡単に説明したい。ウェスタンは、カナダ、オンタリオ州のロンドン市にある。ロンドンは、カナダ最大の都市であるトロントから南西へ車で約2、3時間のところに位置している。「ロンドン」という名前はイギリスのロンドンに由来し、街にはテムズ川も流れている。ただし、こちらのロンドンは人口約40万人、そのうち約1割がウェスタンの学生という学園都市であり、本場のロンドンとは比べ物にならないほど田舎である³。そのせいもあってか街や大学には日本人がとても少なく、ウェスタンの日本での知名度はとても低いですが、ビジネス学部は国際的に有名であり、経済学部もカナダではト

ロント・UBC・クイーンズとともにトップ4に入ると言われている。

ウェスタンの経済学博士プログラムの大まかな流れは以下の通りである。一年目はコア・コースと呼ばれる一連の必修科目群を履修する。これらは今後経済学をやる上で必要最低限の知識や技術を身に着けることを目的としている。二年目も授業履修が義務付けられており、自分の興味関心に基づき授業を選択する。三年目には指導教授と博士論文コミッティーメンバーを選定し、以後研究に集中することになる。大部分の学生は6年かけて博士号を取得している。

いくつか一橋の大学院との違いを挙げてみたい。まずは二年目の授業の豊富さである。二年目の授業は担当の教授自身が専門としている事柄を軸に、基礎となった論文からそれこそワーキングペーパーやジョブマーケットペーパーといった最新の論文まで、重要な論文をカバーする。そのため授業の種類というのは教授の多さと直結しているところがある。先に述べたようにウェスタンは労働経済学の分野は層が厚く、私の関心に近い授業が多数開講されていた。一橋大学では二つしか労働経済学の授業がなかったことを考えると非常に恵まれた環境である。また、ワークショップでは地の利を生かして北米を中心に様々な研究者が発表に来る。論文でしか知らない超大物経済学者がやって来ることもたまにある。普通のワークショップとは別に大学院生向けのものも行われ、一対一で話す機会を提供されることもある。これらは非常に貴重な機会である。

研究の進め方は、自身での作業、教授との話し合い、研究発表、を繰り返し行うという点においては一橋と違いはない。ただしゼミがない分、教授との一対一の関係が強調され、更に言えば、いつミーティングを持つかといったことに始まり、より学生側に主体性が求められる場合が多いように感じられる。「先生」として指導を受けるというよりも、同じ分野の先輩として意見を求めるという姿勢のほうが相応しいのかもしれない。それから、研究を効果的に他人に伝えること、特に口頭発表のスキルが非常に重要視される。日本では、「いい研究であればプレゼンテーションがだめでも理解してくれる人がある」とする風潮があったりもするが、こちらでは、「例えよい研究であっても伝え方が悪かったら誰も理解しないし、それ以上知ろうとしてもくれない」という非常に現実的なスタンスである。これは私も現在とても苦労しているところである。日本人は効果的に他人に物事を伝える訓練をしっかり受けていないのでカナダ人らと比べて劣りやすい。留学を目指している人はぜひ今から訓練してほしい。

研究内容

せっかくの機会なので、私の研究内容について少しかだけ述べたいと思う⁴。はじめに述べたように、私は労働経済学、教育経済学の分野を専門としている。こちらに来る前は男女間格差を中心に研究を行っていた。今でも男女間格差の問題には強い関心は持っているものの、こちらで人的資本の意味での教育と労働市場の接続に興味を持ち始めた。人的資本とは、人が持っているもので、それをを用いて

財を生産すると考えられている概念的なものである。経済学では生産された財に応じて労働者は賃金を受け取る、という考え方をする。人的資本は教育やトレーニングを通じて蓄積されると考えられている。「人的資本の意味での教育と労働市場の接続」として私が意味しているのは、教育を通じて人はどのような人的資本を蓄積しているのか、その人的資本は仕事においてどのように使われているのか、ということである。その中でも私が今特に注目しているのが大学専攻分野による人的資本蓄積の異質性である。

かねてより教育グループ間、例えば大卒者と高卒者間、では収入や健康状態など様々な格差が知られていて、教育が与える効果について非常に多くの研究が行われてきた。しかし近年、日本を含め多くの先進国において大学進学率が高くなっており、それに伴って大卒者内での格差が注目されてきている。大卒者内で違いをもたらす要因の一つとして考えられるものには専攻分野がある。多くの国で専攻分野による賃金の違いというのは指摘されており、最近のアメリカのレポートでは、一番高い学部と一番低い学部の生涯収入の差は大卒、高卒間の差よりも大きいと報告されている (Carnevale et al. 2015⁵)。元々優秀な人が「稼げる」学部に行くことも要因の一つであろうが、先行研究はその要因を制御した上でも賃金リターンに差があることを指摘している。

その他に差をもたらす要因として、大学で蓄積する人的資本が種類や量の意味で専攻分野によって異なる可能性が考えられる。大学で履修する授業、学ぶ内容は専攻分野によって大きく変わりうる。例えば文学部と工学部では似ているところを探すことすら難しいかもしれない。私が知りたいことは、本当に専攻分野によって蓄積される人的資本が異なるのか、異なるとしたらどのように異なるのか、蓄積された人的資本は就く職業によってどのくらい使われ方が異なるのか、そして人的資本の蓄積の違いが大卒者内の賃金格差をどのくらい説明するのか、ということである。これは学部の役割を理解する上でも重要であると考えている。

現在はデータのリッチさからアメリカのデータを用いて分析を進めているが、日本のデータを用いての分析も将来的には行いたいと思っている。日本の就活では出身学部は関係ないと言われていたりするが、その一方で、受験の際に親が子供に文学部になんか行ったら就職先がないとアドバイスをしていたりする。学部の役割についてはまだまだよくわからないことが多い。

おわりに

この雑誌の読者には、大学の国際課といった留学支援業務に携わっている方の他にも、海外留学に興味のある学生もいるのだろうか。本稿はある一人の経済学博士課程大学院生の留学体験記であり、あくまで一つの事例である。留学のスタイルというのは目的によって大きく違ってくる。私は博士号取得を目的としてこちらに来ているので、ほぼ毎日オフィスに来て論文を読んだりパソコンの前で作業したりという生活で、一般の人から見たらあまり刺激的でない生活を送っているように思われるか

もしれない。もちろん私の性格も影響してはいるが、学部時代にドイツへ一年間留学していた時はまったく違った留学ライフを送っていた。それこそ国内外を旅行したり、いろんな国の人たちと友達になったり、地元のスポーツチームに所属したりと、ドイツ文化を満喫するような生活を送っていた。同じ人間でも目的が違えばここまで違う生活を送るわけである。これから留学する人たちは自分の目的にあったスタイルを見つけて充実した留學生活を送ってもらいたい。

私は、海外留学で必ずしも人生が好転するとは考えていないし、全ての人が留学すべきだとも考えていない。ただ、留学によって環境が大きく変わるので、自分の現状を変えるチャンスがたくさんあることは確かである。もし何か自分を変えたいと強く思うのであれば、留学をしてそのチャンスをものできるようがんばるのはありではないだろうか。

最後に、幸運にも私はウェスタンでの一年目から JASSO の海外留学支援制度（大学院学位取得型）を利用させていただいている。この奨学金のおかげで今まで TA 業務に時間を取られることなく研究を行うことができ、留學前から行っていた研究をこちらで完成させ、二本の論文を査読雑誌にも載せることができた。また一橋大学の国際課の方々には JASSO との連絡窓口として度々お世話になっておりとても感謝している。これから残り少ないであろう留學生活を気を引き締めてやっていきたいと思う。

おまけ：ロンドン生活

おまけとしてここロンドンでの生活についても少し述べておこう。博士課程となると学部生とは違って、毎週末バーに繰り出したりパーティーをしたりという生活にはならない。ウェスタンはカナダでは「パーティー大学」と呼ばれているが、博士の学生には関係のないことで、私は大体は、広いキャンパスの一角にある経済学部のエリアで毎日過ごしている。ロンドンでは車を持たなくても一応生きていけるのだが、市内の公共交通機関はバスしかない。ルートによっては本数も少ないため⁶必要以上に外出する気が起きないのだが、たまに他の学生や友達とごはんを食べに行くことはささやかな楽しみである。

それから冬はとても寒い。今年の冬はかなりマイルドだったが、例年はマイナス 20 度ぐらいになる。湖の近くのため雪も非常に多い。東京生まれ東京育ちの自分にとってはなかなか辛い。一年目の冬はも



写真 1 冬のロンドン。このぐらいの雪は珍しくない。

のすごい寒波にあたってしまい、11月下旬から4月上旬まで毎日スノーブーツを履いて登校、一度マイナス35度になるからと大学が休みになったこともあった⁷。

ネガティブなことを書いたが、ロンドンにもよいところはある。まずは治安がよい。もちろんエリアによるが、基本的には夜中一人で歩いていても問題ない。治安は良いに越したことはない。それから自然が豊かである。ロンドンは別名「森のまち」と呼ばれている通り、緑が多い。動物も身近に見ることができ、カナダギースやグラウンドホッグはもちろんのこと、うさぎや鹿なども道端で見かけることがある。日本でみたことのないカラフルな鳥も多い。このような生き物を見かけると、疲れ切った心も和むというものである。私がロンドンで一押しなのは遊歩道/自転車道である。自然豊かで景色のよいところを走っているの、天気の良い日にでもぼんやりと散歩するのは非常におすすめである。



写真 2 カナダギースの親子連れ。あちこちに糞が落ちているので歩く時は要注意。

¹ ちなみに2012年1月26日から、マーケティング戦略の一環として、ロゴやウェブサイト等で「Western University」を使用するようになっている。しかし、法的な名称は変わっておらず、また私の学部の教授陣もみな「University of Western Ontario」を使用しているので、私も「ウェスタン・オンタリオ大学」と呼ぶことにする。

² プログラムとしてはないということで、個人で進めている人はもちろんいる。

³ オンタリオ州のロンドン、というのはカナダ人の間でもネタになる。一度日本から届いた書類でイギリス宛にされたものがあった。

⁴ 私がどのような研究を行っているか興味のある方は私のホームページを参照してほしい。3月14日現在ホームページはまだ作成していないが、近日中に作成予定である。

⁵ Carnevale, Anthony P., Cheah Ban & Andrew R. Hanson, (2015) “The Economic Value of College Majors,” Reports, Center on Education and the Workforce, Georgetown University.

⁶ ちなみに私の家の近くを走っているバスは、あっても30分に一本しかない。

⁷ その結果、「一年目よりはまし」というのがそれ以降クラスメート内での毎年冬の決まり文句となっている。

次号予告
ウェブマガジン『留学交流』5月号
特集「海外留学することの意義」
海外留学の魅力とそれがもたらす効果（予定）

ウェブマガジン『留学交流』 4月号

Vol. 73

平成29年4月10日発行

編集 独立行政法人日本学生支援機構

（編集部）留学情報課

東京都江東区青海 2-2-1（〒135-8630）

電話 (03) 5520-6111

FAX (03) 5520-6121

Eメールアドレス ij@jasso.go.jp

編集後記

本号では、「グローバル化する高等教育」と題し、ASEAN+3高等教育の流動性と質保証及び学生交流のガイドライン、教育と外交、日本留学希望者向けMOOCについて考察し、大学院レベルのダブルディグリープログラムの事例を取り上げております。

また、海外留学レポートでは、カナダの博士課程における留学体験をご紹介します。本号が、留学や大学間交流に携わるみなさまの参考となることを願っています。

本誌へのご意見、ご感想は、上記Eメールアドレスまでお願いいたします。 （編集部）

Web Magazine “Ryugakukoryu”(Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.

The magazine has been made public online without charge since April 2011.
(Issue date: 10th of each month)